

# 空襲展で悲劇訴え 30年

## 「宇都宮平和祈念館をつくる会」事務局長 佐藤 信明さん(69)

安倍晋三政権の下、集団的自衛権の行使容認が7月に閣議決定され、国の安全保障の形が大きく変わろうとしている。終戦から69年の夏に、元兵士や戦争にまつわるさまざまな活動に取り組む人たちの言葉に耳を傾け、改めて平和を見つめ直したい。【長田舞子】

宇都宮空襲について描かれた紙芝居を手にする佐藤さん



終戦直前の1945年7月12日。宇都宮の中心市街地は米軍のB29爆撃機による焼夷弾投下で焼き尽くされ、罪のない多くの市民の命が奪われた。市民団体「宇都宮平和祈念館をつくる会」事務局長の佐藤信明さん(69)は1985年から毎年「宇都宮空襲展」を開催し、戦争の悲惨さを伝え続けている。空襲の体験者は年々減っていき、記憶の

## 見つめる平和

戦後69年に



1

風化も進む。だからこそ戦争の愚かさを次世代に伝えていくことが大切だ」と訴える。福島県相馬市に生まれた。警察官だった父親は戦時中、陸軍歩兵部隊に召集され中国などの戦地に赴いた。戦後、父親の口から戦争の話や聞くことはほとんどなかった。唯一、酒を飲んだ時だけ「自分は人を殺した」とこぼしていた。

## 「次世代に伝えることが大切」

32歳の時、仕事の都合で妻尚美さん(68)の実家がある宇都宮市に引っ越してきた。大学生時代から反戦運動にかかわってきた佐藤さんは、宇都宮で「つくる会」の活動を知って迷わず参加し、1回目から空襲展開催にも携わってきた。

回を重ねる中で、若い人にも関心を持ってもらおうと、B29などの模型を作り、視覚に訴える工夫も取り入れた。戦時中の本や手紙、鉄かぶなどを体験者や家族から寄贈されることも増え、その数は今や1600点に上る。家の中では不要な物でも、語り継ぐ上ではどれも貴重なものだ。

この夏、30回目を迎えた空襲展。多い年には5000人が来場し、オリオン通りで開いた今年は8日間です。

約1800人が訪れた。6、7割は初めて来た人だった。平和祈念館の必要性を訴えているのは、記録を目にする人を一人でも増やしたいという意識がより強くなる。

戦後70年を目前に持ち上り、資料を後世にしっかりと残していくためだ。

小学生の時、原子爆弾が落とされた広島の様子を描いた丸木位里、俊夫妻の巡回展を訪れた記憶があった。「強烈な印象だった。戦争による悲劇を見ることは、平和の大切さを知ることにつながる。『こんなこと込める。』」

戦争を始めれば、あとは拡大するだけだ。人が鬼にもなるのが戦争だ」と力を込める。

宇都宮空襲

1945年7月12日午後11時19分から約2時間20分にわたって、宇都宮市街地を中心に、B29爆撃機115機が焼夷弾を投下した。少なくとも600人以上が犠牲になり、1128人が重軽傷を負ったとされる。焼夷弾の数は1万2704発。軍需工場や軍施設の被害は少なく、一般市民が住む市街地の破壊と、それによる戦意喪失が目的だったとされる。



宇都宮空襲後の市街地を二荒山神社前から撮影した写真

中島みどり氏撮影(宇都宮市文化課提供)